

ただ今 修業中

336 人目

鏡川沿いに立つ高知市の集合住宅。5階建ての最上階で、「和泉塗装」（同市高見町）の職人、宮田翼さん(28)が黙々と刷毛を動かす。器用に壁を縁取りし、それが終わればローラーでペイントし…。

「色あせたり、傷んでいた箇所が、新築のようにきれいになる。やっぱりそれが、この仕事の面白みですかね」
キャリア約10年。熟練工も大勢いる業界の中で、これは負けないと自負するものがある。
「あいさつ。あいさつでお客さんを感動させたい、本当にそう思ってるんです」と胸を張った。

あいさつへのこだわりは、師匠である同社社長、和泉潤さん(36)の教えがある。
夜間高校に通っていた16歳の時、知人の紹介で和泉さんの下で働き始めることに。「塗るだけ」「簡単そう」。事前に抱いていた甘い意識は、現場で一瞬で打ち砕かれた。しかも、「塗る」以前の問題だった。

「以前の問題だった。施主にあいさつができない。言葉遣いがなっていない。和泉さんの厳しい叱咤が続いた。」



好きな言葉

塗装職人

宮田翼さん(28) 高知市曙町1丁目



「好きなのは濃い色の塗装。ガラッと変わる感じが楽しい」と話す宮田翼さん(高知市玉水町の塗装現場)

あいさつに思い込め

「一般のお客さまにとって、塗装の仕事はなじみが薄く、不安がある。だから、気兼ねなく話してもらえような心遣いが大切なんです」と和泉さん。
5年前からは現場を任される立場に。初めて仕事を任切った民家の塗装は「達成感が違っ

れ、手応えを感じた。宮田さんが、そこまであいさつを重視するのは、塗装職人としてのプライドもある。
「この業界、いろんな意味でやんちゃなイメージでしょ。自分も最初はそういう印象でした。実際は、確かに職場は厳しかったが、「仕事に真剣な人たちばかり。面倒見も良かった」。だからこそ、ちまたの職業観を変えていきたい、この思いがあるという。」



その高い意識に見合う技術をどう身に付けていくか。
塗装は奥が深い、という。塗る目的や素材ごとに、最適な塗料の種類、塗り方を選ぶ必要がある。調色の精度も問われるし、塗る作業も「やっぱり、うまい人は違う。刷毛の運び方、タッチ…。安定していて、早い」。そこは、場数を踏み、先輩に習つのみ。一人前の証しである、塗装技能の国家資格にも意欲を見せる。

16歳で社会に出て、同じ世代をうらやましく思ったこともあった。「でも今は、早く厳しい経験をし、手に職を付けることができて良かったと思う。先輩に恵まれたおかげです」
会社の職人は14人。「上からは相変わらずイジラれキャラ」（和泉さん）の一方、10代の若い衆向けには、自分に社長がしてくれたように、厳しく指導する役回りも果たし始めた。
私生活では今年初め、待望の長男、鷹空ちゃんが誕生し、「かわいくて、仕方がない」とも。職人として、父として、自らの明日を塗り変えていく。時期が続く。

写真・岡崎 晴光
文・小笠原敏浩